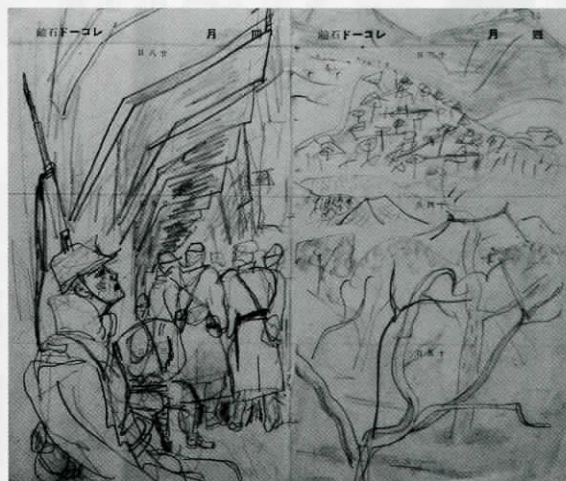
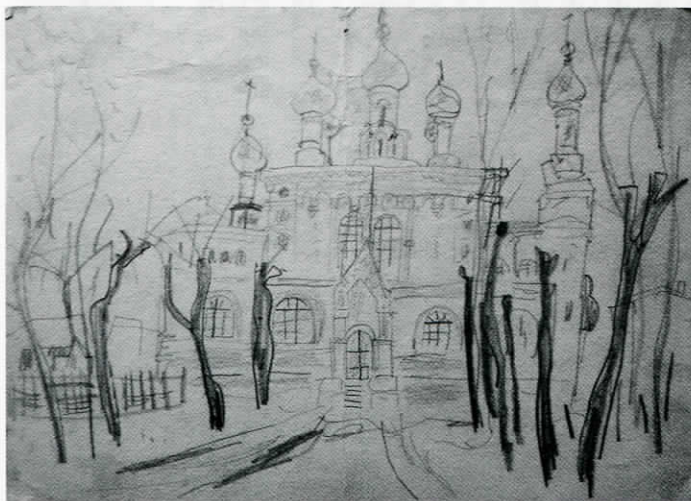


# かも 市史だより



◆編集発行 加茂市幸町二丁目3番5号 加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480



田中道久の従軍スケッチ



▲ スケッチ（幸町 安武輝子氏所蔵）

市内個人宅に、加茂町出身の洋画家田中道久（一九一五〜八一）のスケッチが残っています。道久の生家に伝わった作品群で、昭和十四年（一九三九）に東京美術学校油画科を卒業した後の足跡を窺わせます。

作品はチラシの余白などを利用しており、異国情緒あふれる景色や建物が多く、速筆の鉛筆書きでほとんど彩色はありません。

このうち二枚にメモが入り、うち一枚に「2600.7.15」の日付がみえ、紀元二千六百年にあたる昭和十五年に描かれたことがわかります。もう一枚は日記風の散文で、七月二十五日の日付があり、「廊下を掃除してストーブに火を入れる」「入浴場を奇麗にして火を入れる」「ここで始めて夕の飯上げまで一時間半程よゆうが出来る、好きな煙草を吸ひ、椅子によつてしばし休憩す」など、規律の厳しい集団生活の様子を書いています。この時期の道久は徴兵されて、ロシア文化の影響が濃い中国大陸の北方にいたのではないのでしょうか。

運筆は率直で、本画（完成した作品）とは異なる魅力をはとばしらせています。道久は国画創作協会展覧会で活躍しますが、昭和十五年三月の入選後しばらく活動が途絶えます。スケッチは、この間の事情を伝えています。

（阿賀野市 岩野笙子）

# 文久元年の加茂町騒動とチヨボクレ

文久元年（一八六一）、それまで大きな力を振るってきた市川正平治が加茂町民の一部から庄屋として不相当と訴えられる事件が起こります。「加茂町一件」と呼ばれるこの騒動はいったいどのようなものだったのでしょうか。

## 正平治への批判

文久元年（一八六一）一月、上町の皆川良平や石川の坂内与右衛門らが、庄屋の正平治がこれまで数々の「不正奸巧」で、「一体人氣悪しく、自己勝手な取り計らいばかりで加茂町を衰微困窮」に陥れていると糾弾する訴訟を起こしました（『近世』五八三）。皆川良平は市川・明田川・古川の「三川」に次ぐ大地主になりつつあった新興の地主で、①勝手に高札場を自宅前に移した。②近隣の村々から集めた継所余荷金（加茂町への助郷金）の使途に不明な部分がある。③所有する貸家を明き家と



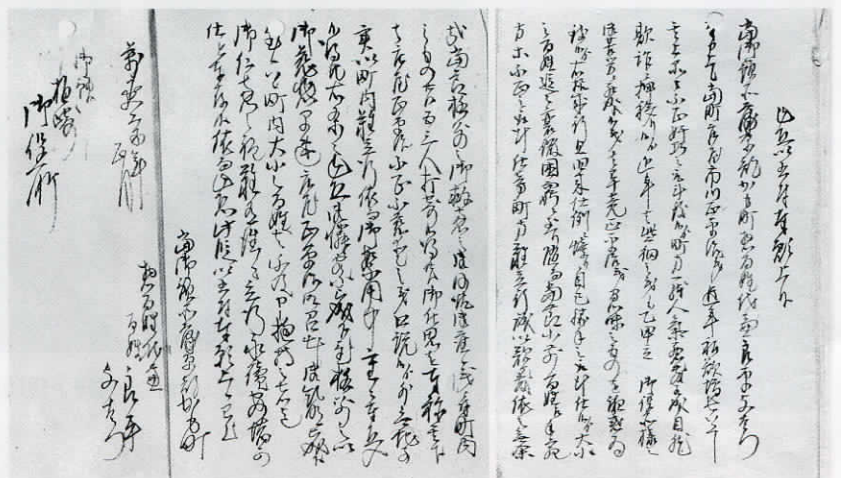
チヨボクレ坊主（『定本江戸商売図絵』より）

偽り、税を納めていない。④加茂川の普請で供出した杭木を自分が出したより多く申告した。⑤私用で柏崎に出かけたのを町の公用と偽り、出張旅費を請求した。⑥万延元年（一八六〇）に窮民への手当て金五〇〇両を出すといいながら、米一〇〇俵しか負担しなかったなど一七件を列挙し、柏崎町（柏崎市）の桑名藩預り役所にその真偽を調べてもらい、加茂町のため庄屋を辞めさせて欲しいと願ったわけです。

## チヨボクレ流し

一般の町民が、騒動を金権的な旧態然とした旦那様政治に終始してきた時代の「世直り」（世直し）の洗礼と認識したのは、同年夏頃にチヨボクレというはやし唄が巷に流れてからでした。

ヤレヤレ市さん。あきれたもんだよ。おまえの為職はなんだと思いやる。越後の加茂町。里正じやないかい。里正であるなら。正しく



▲ 柏崎役所あて皆川良平らの願書 万延2年（1861）（田上町教育委員会蔵佐藤嘉右衛門家文書）

べを突くやら。頸をくくつて。死んだ輩の恨みが積もって。幽霊などが。出かけるさうだよ。チヨボクレとは世情を風刺し、門付けして嘸し立てる芸能の一種です。正平治への風刺は、「越後名物妙々チヨボクレ」の表題で新町の養徳文庫に残り、採録は太平楽人名乗っていますが、おそらく作者その人でしよう。旦那様政治に終始する正平治を追いつ落とすため、旅芸人を使つてチヨボクレを流し、あることないことを誇大に吹聴し、庄屋役に留まれない世論を作る戦術だったのです。僧装束に変装した芸人が、町の隅々にチヨボクレ唄を記した落とし文（チラシ）を配ったのでし

平らに治めりやよいのに。お前の名は表裡名称じゃ。することなすこと鄙劣で未熟で。人面獣心。義理や情けは爪くそばかりも。わきまえなくして。支配の百姓。いじりまわして。無体の難題。どんな飢饉や凶作などにも。水呑み小作の賑恤どころか。屋賃や年貢のわずかな未納を。やたらにせりたて。むくやはぐやら。田疇おこせの。屋敷におかぬの。なんのかんのと。非道の催促。なかにはあんまり。てひどくやられて。のど

柏崎役所は正平治を罷免しましたが、適当な後任がおらず、加茂町年寄で本町の青海屋こと古川伴左衛門を仮庄屋としました。しかし、なお騒動は治まらず、伴左衛門に羽生田村（田上町）庄屋の佐藤伝兵衛と矢代田村（新潟市秋葉区）庄屋の本多蔵之丞の二人を付け、三人体制で事態を收拾しようと図りましたが、この対立は戊辰戦争まで続いていきます。

（近世部会 佐藤賢次）



# 盛んだったカブ栽培

## 戦前～戦後のカブ栽培

信濃川下流域の農村では、各地でカブが作られました。盛んだった背景には、河川の氾濫で流入した砂地の土地の活用がありました。砂混じりの土壌は水はげがよく、カブ栽培に適しています。また、実の周りにできるひげ根が少なくなつて、肌がきれいなものがとれました。

明治～大正期の各種資料をみると、加茂町・矢立新田・下条村・鶴森村と、市域でも広くカブが盛んに作られていたことを確認できます。なかでも信濃川左岸が盛んで、明治九年（一八七六）の比較で加茂町・矢立新田

の生産と出荷額が三五〇束（一束は一貫四百匁＝約五キログラム）・一〇円五〇銭で、一束三銭だったのに対し、鶴森村は五五二束半・一一円一三銭で、一束約二銭でした（加茂市教育委員会所蔵市川浩一郎文書「加茂町・矢立新田物産取調書」／民俗資料館所蔵岡田家文書）。鶴森村ではより多く、安価に売られていたことが窺えます。

この前史もあつて、須田では戦後もカブ栽培が盛んでした。昭和三十五年の統計で、市の収穫面積の八割（五六区、販売農家数の九割弱（一二八戸）を須田地区で占めています。なかでも、後須田産は品質のよさで知られました（『民俗』三三頁）。

▲ 小林トキ氏の「記録帳」 昭和 48～54 年 5 月分（部分）。縦軸は年、横軸は日付を表す（後須田 小林均氏所蔵）

表 カブの春作

昭和 42 年		昭和 48 年	
3.15	かぶ播き	3.22	大根播く、カブ少々播く
3.17	染やカブ地ごしろい	3.31	カブ・小松菜播く
3.19	カブ種入れ	4. 6	大根・カブ、ビニールかける
4. 7	カブ播き	5. 1	大根・カブ、ビニール紙とる
4.23	カブ菜・ホーレン草硫酸やる	5.12	カブ初出荷、1つ 80 円
5. 8	うぐいす菜・小松菜収穫、カブ 1 箱取る		

小林トキ氏「記録帳」より作成

## カブ生産の実態

では、カブはどのように生産・販売されていたのでしょうか。昭和四十一年（一九六六）から五十四年まで日々の農作業を克明に記録した後須田の農家小林トキ氏（一九二九～二〇一八）の「記録帳」から探ってみます（写真）。

葉菜類・果菜類・豆類・いも類など六一品目を、六か所（砂畑・土畑・塚ノ越・三角畑・屋敷・はざ場）に植えています。カブの種は通称「砂畑」に集中的に播いており、作物ごとに土質や地形、それに経験を活かし、適した場所で作ったことがわかります。

カブの特徴は雪解け頃に種を播き、早期の収穫を期待できること、春作・秋作があり、何回かに分けて播くと複数回連続して収穫できることにあり、ともに三月十日に一回目

の種を播いた四十二年・五十一年は、春作の種播きを前者が三回、後者は二回しています。カブの発芽は二〇度以上が適しているため、気候が温暖な年は早く、何度も播け、それが収穫量に直結しました。

「初出荷」の記載がある年は、種播きから収穫までの日数がわかります。昭和四十九年は四月一日に播き、五月十八日に収穫し、栽培期間は四十八日でした。五十日前後の短期間で収穫できるのも、カブ栽培の魅力でした。また、砂地のカブは生育が比較的早く、春野菜の青物が少ない五月上旬に収穫でき、六斎市などで売れ行きもよく、農家の暮らしを支える大事な収入の一つでした。

昭和四十四年の秋作では、一匁（約一八ミリリットル）の種を播いています。一匁からは、約一五〇〇個（一二〇キロ）のカブが収穫できます。年二回播くと二四〇キロになります。一回の収穫は少量でも、複数の畑に数十の品目を組み合わせ、適期により多くの収穫を得ようと努力しました。

信濃川下流域の農家は、土壌に適した農作物を時季を捉えて組み合わせ、経験を活かして工夫しながら暮らしてきました。その一端を、盛んだったカブ栽培に垣間見ることができます。

（近現代部会 勝本幹夫）

# 『大でき加茂新田』再考

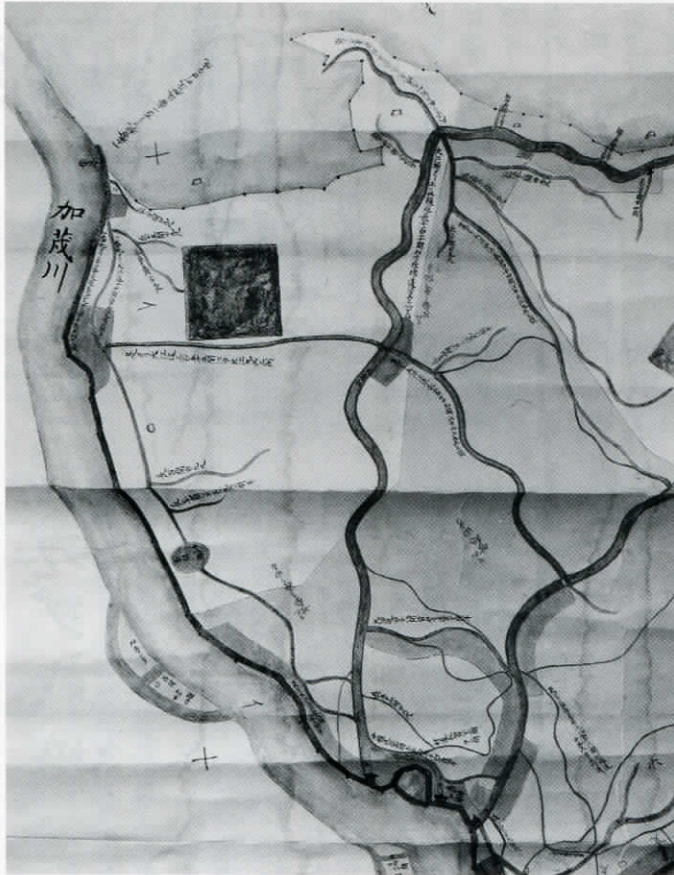
信濃川・加茂川・下条川に囲まれた加茂新田は春先湛水し、農作業には条件の悪い土地柄です。「加茂新田の流れどこ、蓮根の出どこ」「五月二十一日の）加茂祭りの太鼓を聞いて水が引く」「二雨降ると、加茂郷の五三二町歩が五三二なる」など、地域の実情を反映した様々な言葉がありました。

このように、加茂新田の農民にとって最大の敵は水でした。加茂郷の地形は独特で、石川の民家の土台は住寺堀のぐし（屋根の頂上部）と

高さが同じなどといわれました。つまり、住寺堀の一带は海拔が低かったのです。

そこで、加茂川が増水すると、諏訪の木や住寺堀、川西や仲組など加茂新田の農家は俵を担ぎ、いち早く石川へと走りまわりました。石川は砂利がたまつて河床が高く、堤防が低いと溢水しやすかったのです。加茂郷の農耕地自体、加茂川や信濃川の河床より低く、破堤すると冠水し、収穫物は全滅します。そのため、農家は我が家より農耕地を優先して守らざるを得なかったのです。

こうした悪条件のため、加茂新田の農民が豊作（大でき）に恵まれる



▲ 加茂新田絵図 寛保2年（1742）（市史編さん室所蔵）



大通江（現在の住寺堀川）

ことは、あまりありませんでした。そこで、めつたにないことの譬えに「加茂新田が使われて、大でき加茂新田」の謂いが生まれたといわれています（溝口敏磨「大でき加茂新田」）。しかし、別の解釈もできそうです。写真は寛保二年（一七四二）の「加茂新田絵図」から、加茂川流域を引いたものです。絵図を眺めて気づくのは、いかに加茂郷に多数の水路が通っていたかということです。これらの小河川は、加茂川に端を発し、人工的に掘った灌漑・排水路でした。水路には「大通江」「大沼堀」など、銘々に名前がありました。ことに住寺堀川と呼ばれる大通江は、加茂郷のほぼ中央を縦断し、絵図には「中平均十二間」とあります。埋め立てられ昔日の面影を失いましたが、私が幼い頃は、なお舟で行き来

ができました。こうした条件を利用し、諏訪の木や仲組の住民は、船頭・船宿などほとんどが加茂川・信濃川の水運に関係していました。加茂新田の多くは屋敷にハザ場があり、稲は舟上で刈り、農作物は川や堀を縦横に使い運んだのです。

矢立新田の農家で、加茂町会議員を勤め、戦後は加茂郷農民組合を組織して地域の発展に尽力した有本基作（一九〇九〜一九八九）は、こうした条件にある加茂川下流の集落民がいったん大雨になると即座に集まり、杭を打って土俵を積み、水防に尽くした経験を書いています（『加茂郷における農民運動』）。かつ、無事水害の阻止に成功すると、周辺の村から称賛され、「大でき加茂新田」の異名をとったというのです。

この言葉には、さらに異説が残っています。青海神社では、六十年ごとに「六十一年式年祭」と呼ばれる大きな祭礼を執行します。大正九年（一九二〇）の式年祭で、加茂新田の若い衆が模型の船に米俵を積み、山車行列に参加し、それをみた町長が思わず「大でき加茂新田」と褒めたのが語源、というのです（前掲書）。どの説も真理を穿っていると思いますが、私の体感では危険が迫り、団結した地域が見事水難を退けて生まれた言葉、と理解したいと思えます。

（新栄町 中山 勇）